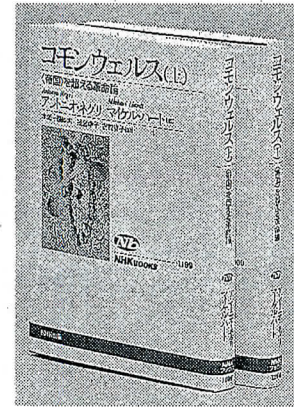


# コモンウェルス 〈帝国〉を超える革命論(上・下)

アントニオ・ネグリ & マイケル・ハート 著

## 世界を変える概念提起

(NHK出版・各1470円)



『帝国』(二〇〇〇年)、『マルチチユード』(二〇〇四年)に続く3部作の完結編である。これまで著者たちが論じてきたのは、覇権国家、国際機関、多国籍企業、市民社会によって形成される「帝国主義なき帝国」の様相であり、表面上は民主主義だが、

実態は君主政、貴族政、民主政の各階層からなる異種混交政体という、衝撃的な世界の姿であった。この世界を変革するために、本書は「コモンウェルス」(共)という「開かれた社会的関係」を提起している。所有権の歴史をひもといた第一部に続き、第二部では近代性と権力を検証。第三部は資本と富について、私有化されることも困り込まれることもない「共」、すなわち協働のネットワークの意義を説いている。第四部はアメリカ覇権の失敗と多国間協調主義の限界を論じ、第五部は新自由主義と資本主義の矛盾を示唆、第六部では現行の民主主義に対し、彼らが「革命」と呼ぶ諸制度改革が強調されている。

論点は多岐にわたり、内容は平易ではない。本書の重要なメッセージを二つ抜き出せば、まず国家、宗教、民族、階級といったアイデンティティに対する拒絶がある。彼らにとって、アイデンティティとは獲得するものではなく、克服されるものなのだ。もうひとつは、現行の民主主義への鋭い批判である。民主主義は教育水準や生活水準と密接に関連しているため、経済的・社会的な疎外や排除の問題抜きには語れなくなった。代表制民主主義はこうした問題を直視することができない。そして、アイデンティティも代表制民主主義も「共」を阻害していると主張する。

かつて、アイデンティティや民主主義はグローバル資本の圧力に対抗する有力な処方箋であった。しかし、その力への期待は今やすっかり色あせてしまい、世界は依然として平等でも公平でもない。先進国と途上国の間には気の遠くなるような格差が横たわっている。そうした問題を直ちに克服することは期待できそうにない。だが、本書の警鐘に耳を傾けることは、世界を変える一歩になるかもしれない。水嶋一憲監訳。

(九州大准教授・政治学 大賀哲)

アントニオ・ネグリ イタリアのマルクス主義社会学者・政治哲学者。  
マイケル・ハート 米国の政治哲学者・比較文学者